

# 令和6年度の学校改善策についての結果報告

世田谷区立烏山小学校

令和5年度の学校関係者評価結果を受け、令和6年度は取り組んできました。その結果を重点目標に沿ってご報告いたします。

## I 主体的に探究する子どもの育成

\*学習のめあてについて、主体的に探究する

### (1) 学習のめあてを主体的に解決して、その結果を振り返り、深い学びにつなげる。

「協働的な学び」を推進していく上で、本校の「めあて学習」をベースに置く。

子どもが「めあて」(課題)を持ち、見通しをもって「めあて」(課題)に、主体的に取り組ませ解決する授業をする。その学びの過程の振り返りをさせ、深い学びやキャリア形成につなげる。めあてをも

つ→予想する→自力で解決し自分の考えをもつ→友達と考えを練り合う(協働的な学び)→めあてに對するまとめをする→学びを振り返る(深い学び)

### (2) めあてに対して考え、判断し、タブレット端末を文具として活用し、自分の考えをもち、表現する力を高める。

「めあて学習」の過程で、自分の考えを書く時間を必ず設ける。思考ツールを使うなど、自分の考えの書き方を工夫させる。「めあて学習」の過程が分かる書き方を指導する。同様に、板書も「めあて学習」の過程が分かるようにする。このようにして、書く内容の量や質を高める。また、自分の考えを話したり、ロイロノートで考えや意見を共有するなどタブレット端末を文具として活用して伝えたりして、自分の考えを発信したり、アクションを起こしたりするなどの表現する力を高める。

### (3) 自分の考えを協働的な学びを通して深め合うことができる力を伸ばす。

子ども同士あるいは多様な他者と協働しながら、自分の考えを深めたり広げたりする学び合うよさや楽しさを実感させる。そして、学び合いながら課題を解決したり、成長したりすることを通して、主体的に学ぶ姿勢を育てていく。そのために、教師や子ども同士が、集団の中で一人一人のよい点や可能性を認めて生かし、異なる考え方を組み合わせ、よりよい学びを生み出していく。話し合いでは、教師が授業をデザインし、問い返しの発問をしたり、新しい資料を提示したり、判断を求めたりして、思考を深めたり広げたりしていく。

### (4) 自分の行動が、周囲を変化させる実感を持った活動の経験を積み、自己効力感を高める。

「キャリア・未来デザイン教育」では、「子どもたちが将来、社会の中で課題意識をもち、自分の役割を果たしながら、自分らしい生き方を実現できるように」を推進している。これを踏まえて、子どもたちが、「めあて学習」を通じて、学んだことや自分の行動が周囲を変化させたという実感を持たせることによって、自己効力感を高めていく。そして、学んだことが社会で役に立つという実感や、将来の夢や目標の実現への意欲や、人の役に立つ人間になりたいといった意志を育てていく。

これらの取り組みを通じて、将来、子どもたちが、予測困難な時代に、新たな価値を創り出そうとしていく必要な力を培っていく。

## 【成果と課題】

- 児童の質問項目「先生は、課題（めあて）について、自分で考えたり、友達と考えたりする時間を授業の中で取っている。」は、昨年よりも7.5ポイント減少しているものの、肯定的意見が87.6%と高い。子どもに問題意識「めあて」をもたせ、「めあて」に向かって取り組ませることにより、主体的に探究する姿勢を概ね育てることができているといえる。
- 児童の質問項目「授業で自分の考えをもつことができている。」の肯定的意見が91.9%と極めて高い割合である。前回までは、考えを書くことができているかどうかの質問であった。協働的な学習を進めるにあたって、まずは、一人一人に考える時間を与え、自分の考えをもつことが重要である。自分の考えをもつ上で、一人一台タブレット端末を文房具の一つとしての活用もすすんでいることが成果である。
- 児童の質問項目「授業では、考えたことを話し合ったり発表し合ったりする機会がある。」の肯定的意見が99.0%と極めて高い割合である。前回よりも僅かであるが0.8ポイント上昇した。また、「私は、友達の考えを聞いて自分の考えを深めたり、広げたりしている。」の肯定的意見が84.8%と昨年度と比較して1.3ポイント微減している。校内では、協働的な学びの校内研究を行い、取組の成果が表れているといえるのではないかと。
- 児童の質問項目「授業で自分の考えを伝えることができている。」の肯定的意見は71.9%と高くなく、昨年度と比較しても0.4ポイントしか改善されていない。また、児童の質問項目「学ぶことが楽しい」の肯定的意見が78.9%と8割を下回る。今年度は、教師が果たす役割などそれぞれが課題をもって研究に取り組んできたが、引き続き児童が主体的に学べる授業改善に向けて努力していかなければならない。
- 保護者の質問項目「本校は、子どもがかんがえることや、課題を解決することを大切に授業を行っている。」の肯定的意見は81.0%と昨年度と比較してもほぼ横ばいである。めあて学習や協働的な学びについて、学校は引き続いての説明を行っていくことが課題である。

## Ⅱ 多様性を認め合える子どもの育成

\*自分のよさや可能性を信じ、互いの違いを認め合い、よりよい学級をつくろうとする

(1) 特別活動を中心に自分をかけがえのない存在として捉え、互いの違いを認め合える学級集団に育て、個々のよさが発揮でき、みんなで高め合える学級づくりをする。

自分をかけがえのない存在として捉えることが、自分を大切にし、自分にはできることがあると考えることができる。自分の思いや考えを共感的に受け止めてもらえることや多様な人との関わりの中で認められることによって自己肯定感を育てていく。具体的には、子ども一人一人の個性（よさや課題）の違いや多様な考えを認め合うことができる学級集団に育てる。そのためには、まず、教師自身が個々の子どものあらゆる表現を否定せず、まずは受け止める態度が大事である。児童理解を深め、学級の中に個々の居場所をつくり、個々のよさを発揮し活躍できる場を意図的に設ける学級・専科経営をする。

協働して集団や生活上の諸問題を解決し、よりよい学級を創ろうとする子どもたちに育てていく。自

分のよさが発揮でき、クラスのために役立っていることを教師が意図的に気付かせていく。これらを学級活動や児童会活動、学校行事等の特別活動、学級経営や生活指導などで、日常的に行っていく。また、年に2回のQ-U調査を効果的に活用し、学級・専科経営に生かす。

## **(2) 道徳を中心にして一人一人の人権意識を高め、いじめを許さない思いやりあふれる学級づくりをする。**

「いじめはしない、いじめを許さない、いじめを見逃さない」を徹底し、道徳の内容項目の人との関わりに関することを重視し、「友情、信頼、親切、思いやり、相互理解、寛容」を重点に指導する。また、「きまり」は、人とよりよく生きていくためのものであることを理解させ、学校や学級のきまりを自主的に守ることができるようにする。また、「人の嫌がることはしない、言わない。」「人の話しは最後までしっかりと聞く。」を校長との約束とする。

## **(3) 教室に入ることが難しい児童への居場所づくり（ほっとスペース）を進める。**

ほっとスペース（別室登校）は、学校に登校しているものの、様々な事情から教室に入れにくい子どもに対しての居場所づくりをすすめる。サポーターを配置し、担任と連携しながら、少しでも円滑な学校生活につなげていけるよう居場所づくりを進める。スペースは、ランチルームや2階 BOP 室、教育相談室を利用する。

## **(4) 異学年の交流、つくし学級、せせらぎ学級、学校外の人との交流等、多様な他者と関わる機会を増やす。**

多様性を認め合う共生社会で生きるためには、多様な他者と関わり理解しあう場が必要である。縦割り班遊び、つくし学級やせせらぎ学級と通常学級との交流、中学生・幼児・高齢者・障害のある人・外国人との交流活動を通して、様々な人と関わり合う活動の機会を多くすることを通じて、インクルーシブ教育や多文化共生教育や性の多様性の理解を進め、人権意識を高める。

## **【成果と課題】**

- 児童の質問項目「私は、クラスのために役立つとうとしている。」の肯定的回答が昨年度75.8%から4.8ポイント改善し、80.6%となった。また、児童の質問項目「クラスの友達は、私のことを認めてくれている。」の肯定的回答が、79.4%で8割を割るが、3年連続で改善傾向にある。このことは、子どもたちが自己効力感や自己肯定感の向上に結び付いていると期待できる。
- 児童の質問項目「私は、学校のきまりを守って、行動している。」が83.9%と高めではあるが、2.8ポイント下降している。同じく、「学校のきまりを守らない児童に先生は注意している」の肯定的意見は、82.7%と高めではあるが、こちらも6.4ポイント下降している。学校のきまりは、人とよりよく生きていくためのものであることを理解させ、学校や学級のきまりを自主的に守ることができるようにする意識を高めていくことが課題である。
- ほっとスペースを1学期はランチルームの一角に、2学期は、元せせらぎ学級のせまい教室の一部に設置した。2名のサポーターを配置した。引き続き、学校に登校しているものの、様々な事情から教室に入れにくい子どもに対しての居場所づくりを進めることが課題である。

・縦割り班遊びを通年実施し、総合的な学習の時間において、外国人との交流や各方面での専門家や地域の人材を生かした取組を行うことができた。他にも学び舎として中学生ボランティアによる運動会や避難所運営の手伝い、あいさつ運動などでも人的交流を行うとともに、保育園児を招いての1年生との交流を計画している。つくし学級と通常学級との交流では、行事及び発達段階に応じた教科学習への交流が行われた。せせらぎ学級でも、個に応じて行事、教科学習、校外学習、移動教室の他に、通常学級との混合チームを結成してのポッチャ大会に出場するなど、校外イベントなどの交流を積極的に展開した。引き続き、様々な人と関わり合う活動の機会を多くすることを通じて、インクルーシブ教育や多文化共生教育や性の多様性の理解を進め、人権意識を高めていくことが課題である。

### Ⅲ 心と体の健康な子どもの育成

\*自分の心と体の健康を意識し、すすんで体を動かそうとする

(1) 外遊びや体育の取組は、体力以外にも目標に向かってがんばる力(意欲)、人とうまく関わる力(協調性)、感情をコントロールする力(忍耐力)などの非認知能力を伸長させることができることを意識させる。

コロナ禍が明け、外遊びができるチャンスが増えたが、保健室や事故報告で、思いがけないケガがまだ多い。外遊びなどによって、外遊びをすることで、子どもの基礎体力や運動能力の向上が期待できることはもちろん、外で遊ぶと、さまざまな動作が求められるため、自然と体力がついたり、体の動かし方がうまくなったりする。そこで、子どもたちには、体を動かすことのよさを伝えていきたい。

体を動かすことが、体力以外にも目標に向かってがんばる力(意欲)、人とうまく関わる力(協調性)、感情をコントロールする力(忍耐力)などの非認知能力を伸長させることができることを意識させ、すすんで体を動かそうとする子どもを育てる。

(2) 休み時間に外遊びを推奨し、子どもたちが遊び出す環境づくりを行う。

体力調査において、本校は東京都と比較してもかなり多くの項目で平均を下回っている。そこで、体育委員会などで、多様な動きを経験できる遊びの紹介や固定遊具を活用した遊びの紹介、また、俊敏性や投力などが身に付くように、体育的行事部会による校庭や屋上での遊び道具の準備など、休み時間に子どもたちが遊び出す環境づくりを行う。それに伴い、休み時間の外遊びの約束や学年の割り振りなどを見直し、子どもたちが遊び出す環境づくりを行う。

(3) 体育の授業を中心とした学校生活の中でなわとび旬間や持久走旬間、体力測定に向けた取組によって体力向上を図る。

体育では、本校の児童の実態に合わせた学習内容を検討し、授業内容の充実を図る。また、体育で取り上げる内容と連動させて、なわとび旬間、持久走旬間、体力テストへ向けての強化指導などを行い、体力向上を図る。また、家庭でも取り組める内容を盛り込み、日常の遊びや取組にも連動させていく。

(4) 「学校は失敗してもいいところ」として、失敗してもすぐにあきらめない「しなやかな心」を育む。

「しなやかな心」は、温かい雰囲気のある居場所で育まれていく。温かい学級・専科経営の下、教師

や友達からの励ましや、めあて学習の協働的な学びなどから、互いのよさを認め合う機会を通じて、自己効力感や自尊感情を育まれていくことがベースとなって、「しなやかな心」を養われていく。また、この取り組みを通じて、非認知能力の伸長にも効果が期待できるところである。そして、たとえ困難に向かい合ったときに、原因を自分のせいにするだけではなく、多面的に捉えられるようにしていくようにさせていきたい。失敗したことや困難に向き合ったときに、否定的な出来事として捉えるのではなく、成長の機会や学びの経験として認識できるように「しなやかな心」を育む。

## 【成果と課題】

- 児童の質問項目「私は、体を動かすことが大切だと思っている。」の肯定的意見が88.1%と昨年度よりも2.9ポイント下降したが、かなり高めではある。保護者への質問の肯定的意見が、77.8%と昨年度比べて0.4ポイント下降しているが、現状は維持されている。体を動かすことは、体力以外にも非認知能力などの伸長ができる図れることを子どもが理解してきている。
- 児童の質問項目「私は、体を動かすことが楽しい。」に対する肯定的回答が86.9%であり、昨年度よりも5.7ポイント改善した。また、児童の質問項目「私は、学校や学校外で体を動かしている。」の肯定的意見が、77.8%であるが、昨年度と比較して6.9ポイント改善した。同じく、保護者の質問項目「わが子は、学校や学校外で体を動かしている。」についても、76.9%だが、昨年度よりも7.4ポイント大幅に上昇している。児童、保護者共に体を動かすことが大切さを理解し、楽しさを味わうことにつながってきた。また、子どもたちが遊び出す環境づくりを行ってきた成果といえる。
- なわとび旬間、持久走旬間および持久走大会を実施した。今年は学芸会と持久走との取組期間が近く、教師の負担感が大きかった。来年度に向けて、学校年間予定に無理なく計画していくことが課題である。
- 児童の質問項目「目標をもち、その実現に向けて努力している。」の肯定的意見は83.7%と5.6ポイント改善している。今後も「学校は失敗してもいいところ」として、失敗してもすぐにあきらめない「しなやかな心」を育てていきたい。